

## 資源管理・海洋環境シリーズ

## オットセイ食性実態把握調査について

キーワード：オットセイ、漁業被害

## オットセイ調査始まる

北海道沿岸の特に日本海側では、近年オットセイによる沿岸漁業の被害が拡大しており、漁業者からは早急な被害対策が求められています。このため、北海道では平成23年度より「オットセイ基礎調査検討協議会」を設置し、漁業被害実態把握のための基礎調査を開始しています。稚内水産試験場もこの検討協議会に参画し、食性実態把握調査を実施しています。

本稿では、この度北海道で初めてオットセイの捕獲調査が開始されたということもあり、漁業者からの成果の期待も高い事業であることから、その概要について紹介します。

## 北海道に來遊するオットセイとは何か

我が国でオットセイと呼ばれる動物は、北太平洋に広く分布し、標準和名をキタオットセイといい、アシカ科に属し1属1種をなします。南半球に生息するミナミオットセイとは形態は似ていますが、別の属になります。国内では単に「オットセイ」と呼ばれることが多いことから、本稿では以降「オットセイ」と記載します。

オットセイの繁殖場はロシア～カリフォルニアにかけての海域（図1）にあり、7～10月の繁殖期には繁殖場周辺にいますが、11～6月に日本近海へ來遊してきます<sup>1)</sup>。

オットセイはかつて1700年代より毛皮を取るために大規模な獵獲が行われ、世界的に生息数が激

減しました。その後、オットセイは表1に示したような国際条約や法律により、ラッコとともに保護されてきました。

現在では、プリビロフ諸島で年間500～600頭の生存捕獲<sup>2)</sup>、チュレニー島で年間1300頭前後の商業捕獲<sup>3)</sup>などが行われていますが、日本では先述の国内法により、死骸を所持することも禁止されています。また、一部の繁殖場を除き、生息数は回復しつつあり、その数およそ110万頭とされていますが<sup>4)</sup>、IUCN（国際自然保護連合）の基準では現在も絶滅危惧II類（Vulnerable）に分類されています。

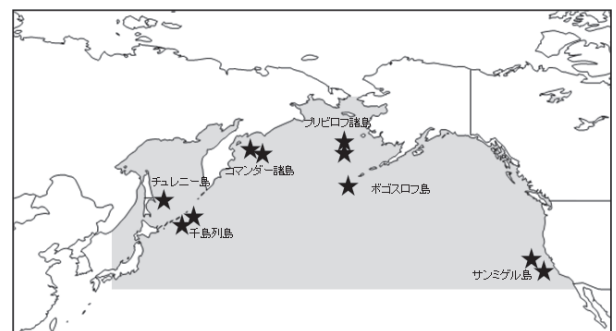


図1 オットセイの繁殖場（★）と分布（灰色）（馬場<sup>1)</sup>などより作成）

## これまでのオットセイ調査

1950年代～1980年代まで、オットセイの生息数回復を目的とする生息域全体での調査の必要性から、日本周辺でも大規模な調査が行われ、日本への回遊様式や食性などが解明されてきました<sup>5, 6)</sup>。

例えば三陸沖へは、親潮とともに南下し、黒潮の張り出しに伴い北上することが明らかになりま



写真：北海道で偶然上陸したオットセイ（オス）

表1 オットセイに関する条約等の変遷

年	内容	参加国
明治44年(1911)	臙肭獣 <sup>おっとせい</sup> 及臙肭虎 <sup>らっこ</sup> 保護条約締結	日・英・米・露
明治45年(1912)	臙肭虎臙肭臙肭獲取締法制定(国内法)	
昭和17年(1942)	臙肭獣及臙肭虎保護条約失効	
昭和32年(1957)	北太平洋のおとせいの保存に関する暫定条約	日・米・露・加
昭和32年(1957)	北太平洋おとせい委員会発足	
昭和59年(1984)	北太平洋のおとせいの保存に関する暫定条約失効	
平成11年(1999)	臙肭虎臙肭臙肭獲取締法 改正	

した<sup>5),1)</sup>。また、雌雄や発育段階によって回遊様式が異なっていることが知られています<sup>5)</sup>。

オットセイの日本近海での餌は、魚類（スケトウダラ、ハダカイワシ類、マイワシなど）やイカ類（スルメイカ、ドスイカなど）とされています<sup>6)</sup>（表2）。また、Yonezaki *et al.* (2008) は、三陸沖の調査結果から、マサバの資源量が豊富であった1970年代は、オットセイはそれらを主要餌生物とし、マイワシ資源量が豊富であった1980年代にはマイワシを主要餌生物とするというように、魚種交代に対応して餌生物を切り替えていたことを明らかにしました<sup>7)</sup>。

### 最近のオットセイ事情

オットセイは沖合に分布することから、1960年代頃はさけます流し網などで漁具被害が報告されていましたが、沿岸漁業との摩擦が問題になることは少なかったようです。それでも、檜山管内では、スケトウダラ延縄漁業の操業中にオットセイが船に付きまとうといった苦情はありました。

表2 日本近海におけるオットセイ食性調査および主要餌生物

海域	年	胃数	主要餌生物	文献番号
日本海	1962~63	537	スケトウダラ ドスイカ	8)
太平洋	1962~63	865	オオクチイワシ スルメイカ	8)
三陸沖	1966~72	1933	マサバ タラ科魚類	9)
日本海	1967~71	47	ドスイカ スケトウダラ	9)
太平洋	1973	278	イカ類 ハダカイワシ類	10)
太平洋	1973~76	448	ツメイカ ハダカイワシ類	10)
日本海	1973・1976	44	ドスイカ スケトウダラ	10)
常盤~三陸沖	1980年代	1040	イカ類 マイワシ	7)
常盤沖	1997	51	ホタルイカ ハダカイワシ類	7)

2000年代に入った頃から、北海道の日本海沿岸で、オットセイによると思われる漁業被害が多発するようになりました。こういった問題から、近年ではオットセイの来遊状況や北海道における摂餌生態の解明が喫緊の課題とされています。

### オットセイ食性実態把握調査

平成23年度から北海道が実施しているオットセイ基礎調査（図2）のうち、稚内水産試験場では食性実態把握調査を担当しています。

具体的な調査項目は、松前沖に来遊するオットセイを採捕し、胃内容物分析により当海域におけるオットセイの食性を解明することです。

得られた結果から、オットセイが実際に北海道沿岸でどのような漁獲対象種をどれくらい捕食しているのかを推定します。それにより、漁業活動との摩擦の実態を明らかにすることができると考えています。

これまで北海道沿岸におけるオットセイの捕獲調査は行われていませんでした。したがって、北海道沿岸での食性に関する知見はほとんどありませんが、津軽海峡周辺海域で刺し網に混獲されたり、死亡して漂着したオットセイの胃内容物からは、イカナゴ、ヤリイカおよびホッケなどが見られたと報告されています<sup>10)</sup>。ただしこれらの漂着個体では、胃内容物は消化されていることが多く、十分な情報が得られません<sup>11)</sup>。

今回の調査では、採捕個体の胃内容物分析を行いますので、より詳細な食性に関する解析結果が得られることが期待されます。

オットセイ基礎調査では、食性調査以外にも出現状況調査による来遊状況の把握（北海道大学）や、漁業による混獲実態の把握（北海道庁）なども行われます（図2）。このように、地元・行政・研究機関の協力関係に基づく、体系的な調査を実施することにより、効果的な被害対策の構築を目指すことができると考えています。

引用文献

- 1) 馬場徳寿. 1997. キタオットセイ. 日本の希野生水生生物に関する基礎資料 (IV). 水産資源保護協会. 東京. 349-355.
- 2) Allen, B.M. & R.P.Angliss. 2011. Alaska marine mammal stock assessments, 2010. NOAA Tech. Memo. NMFS-AFSC-223.
- 3) Kuzin, A.E., 2010. The Intrapopulation Structure of the Northern Fur Seal (*Callorhinus ursinus* L.) on Tyuleniy Island during the Post Depression Years (1993-2009). Russian J. Mar. Biol. 36 (7) :507-517.
- 4) IUCN. 2011. <http://www.iucnredlist.org/apps/redlist/details/3590/0>
- 5) 和田一雄. 1969. 三陸沖のオットセイの回遊について. 東海水研報. 58. 19-82.
- 6) 和田一雄. 1971. 三陸沖のオットセイの食性について. 東海水研報. 64. 1-37.
- 7) Yonezaki, S., M. Kiyota & N. Baba. 2008. Decadal changes in the diet of northern fur seal (*Callorhinus ursinus*) migrating off the Pacific coast of northeastern Japan. Fish. Ocean. 17 (3) . 231-238.
- 8) 北太平洋おととせい委員会. 1971. 北太平洋お

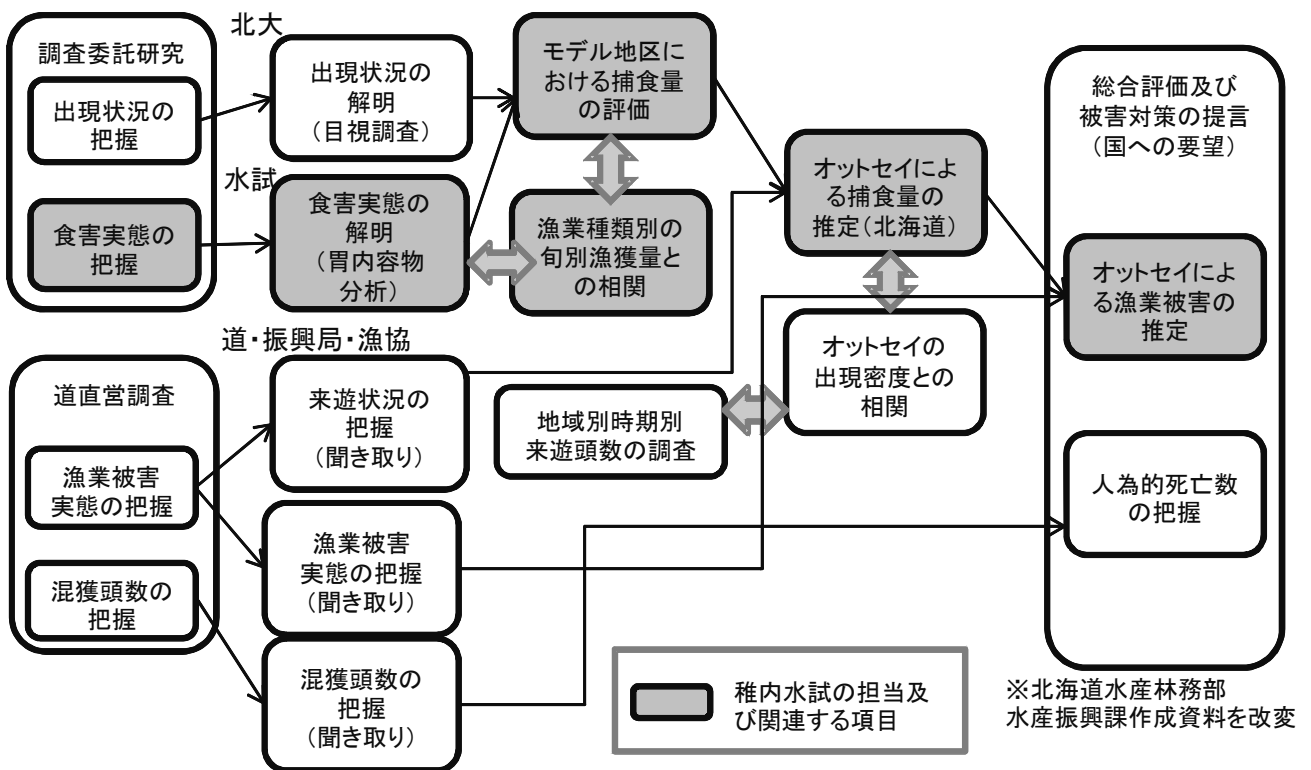


図2 北海道によるオットセイ基礎調査 (H23~25) の調査フロー

- っとせい委員会調査報告 1962-1963. 在ワシントン委員会本部刊行. 94pp.
- 9) 北太平洋おっとせい委員会. 1975. 北太平洋おっとせい委員会1967~1972年の調査報告. ワシントンD.C.委員会本部刊行. 196pp.
- 10) 北太平洋おっとせい委員会. 1980. 北太平洋おっとせい委員会1973~1976年の調査報告. ワシントンD.C.委員会本部刊行. 178pp.
- 11) 堀本高矩・後藤陽子・三谷曜子・小林由美・桜井泰憲. 2010. 冬- 春期の道南海域における鰭脚類の混獲・漂着記録とその食性. 日本哺乳類学会2010年度大会講演要旨集.
- (後藤陽子 稚内水試調査研究部  
報文番号B2358)